the loss of mercantile power to the Dutch and British traders. From the mid-18th century, the French, Dutch, Danes, Swedes, Americans and Spanish all profited from trading with China. Macau, in effect, became an outpost for all European countries. By the late 19th century, Macau had turned into something of a decaying backwater When the Sino-Japanese War erupted, Macau's population swelled. Europeans took refuge in Macau during World War II. More people came in 1949 when China came under communist rule. The landscape was dotted with living quarters for government workers and large low-rent housing projects. Since the city's return to China at the end of 1999, China has designated Macau as a Special Administrative Region (SAR) and invested heavily in its infrastructure and development. There is a rising awareness of Macau's cultural heritage and the preservation of the city's historical buildings and quarters is in progress. Confined to a narrow peninsula and two small islands, space has long been at a premium and land reclamation has been an integral part of Macau's development. The dramatic growth in size of the peninsula is a fundamental visible alteration in the city's morphology. Through the examination of the dynamic nature of the morphology of Macau, this paper illustrates the notion that city morphology is a reflection of global human endeavours.

【コメント】　野間 晴雄

マカオは人口わずか40万あまり、東シナ海に突き出た岩山と島嶼からなる東アジアでも最も古い植民地である。発展する中国沿海部や香港と至近な位置にありながら、今も植民地時代の景観や雰囲気を色濃く残すタイムカプセルでもある。しかしながら、近代のマカオはギャンブルやマフィアに経済を依存せざる得ない負の遺産が常につきまとう、日陰の“忘れられた”植民地であったことは拭えない事実だ。1999年12月、マカオは香港に遅れること２年で中国に返還されたが、貿易・工業いずれも香港や広州、その他の発展著しい沿海諸都市とは比べるべくもなく、観光が最も重要な産業となっている。

16世紀半ばにポルトガル植民地となったマカオは、スペイン・ポルトガルの「世界分割」によって獲得したアジアの橋頭堡ゴアのブランチであるマラッカの、さらにそのサブブランチ程度の経済的重要性と地政学的位置しか当初は有しなかった。それが日本へのキリスト教布教に相携えてもたらされた日本産の良質の銀を中国・ヨーロッパに輸出する中継点として、マカオはにわかに繁栄する。

しかし、偶さかの繁栄は17世紀前半に鎖国による日本貿易から撤退と本国の国力衰退によって一挙に失われ、以後は長い停滞と衰退の道を歩む。1842年の香港開港によって、マカオの中国貿易がほぼ終焉したこと、文化大革命によるポルトガルの植民地権力の失墜もマカオの幕引きに拍車をかけた。このように３度も“世界システム”から忘れ去られたマカオであり、自らも植民地放棄を望み、中国政府からもお荷物扱いされながらも、「中国でもっとも長い植民地

統治」という不名誉な称号を得たのは単なる歴史の偶然だろうか。

島崎報告はこのマカオの歴史的変遷過程を、外世界の門戸（gateway）ととらえ、古地図などから都市形態の進化（evolution of urban morphology）を的確・丹念に捉える。さらに報告で精彩を放っていたのが、40年の歳月を経た再訪での変化を、自ら絵筆をとって描いた詩情豊かな回顧の風景画である。

島崎は統計数字や機能分析だけからは得られない直観と港湾都市の全体性を重視する。しかし、外的世界との関わりを考えるならば、貿易量や品目の変化を示す資料と、港湾の形態のさらに踏み込んだ分析も少しはほしかった。

ここでは、「世界史への門戸」という文脈を、もう少し地域スケールを落として、華南沿海部の港湾システムネットワークの変遷から、次の５つのステージに分けることでコメントしてみたい。

1）唐以来の中心港湾は珠江（チュー川）の河港である広州で、広大な後背地を背景に貿易・流通を独占していた。

2）東アジア最古の植民地として珠江デルタ先端の岩山が選ばれたとき、広州との太いパイプで生糸などの中国物産が日本へ送られ、銀の中国本土流入の中継地としてマカオの地位が確立する。

3）1842年にイギリスが香港島を領有すると、マカオと広州とのネットワークは弱体化し、広州―香港ルートが中心となる。

4）香港の港湾・都市としての急成長、ポルトガルのアジアでの覇権の消失により、マカオは香港を介する緩衝剤としてしか経済的意義を持たなくなる。観光も香港からのギャンブルを中心とした日帰り客や短期滞在を当て込む。「香港マネー」・「外国在住華人マネー」による広東省への膨大な投資、とりわけ珠江デルタの工業化への投資により、香港―広州ネットワークに付属するかたちでの経済発展がますます顕著になっている。隣接する珠海経済特区の発展による波及も期待される。

5）マカオと香港の中国返還によって、香港が相対的な経済力を落としてきており、今後は広州―香港―マカオの三角形のなかで、広い後背地をもつ広州のさらなる発展が予想される。マカオはその一角に、何をもって、どう食い込むべきか、その模索が今始まろうとしている。

（関西大学文学部）